
神様の絵の具

蔡鷺娟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の絵の具

【Nコード】

N8097Z

【作者名】

蔡驚娟

【あらすじ】

交通事故で恋人を失った高校生のアキ。悲しみにくれる彼女を見守る家族。ある朝、アキの目の前に翼を持った天使が現れた。それは、失った恋人と同じ姿をしていて……。

どうしようもないことや、逃げられない運命があつて、それでも心だけは自由だと、想うことだけは自由でありたいと、そう願って創作しました。震災の後で不愉快に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。でも、想いが伝わればと願っております。

序

青年は空の中に立っていた。

それはちょうど、透明なガラスの板の上から、地上を見下ろしているような感覚。

けれども東京タワーの展望台もこんなに高くはなかったし、と青年 隼人^{はやと}は内心でこちる。足元もそうだが周りに一切掴まれるものもないことが、より一層の恐怖をあおって無意識に体が震えた。

茶色がかった短い髪を風に躍らせた隼人は、確かに立っているというのに足元には何も無いという不安感にやつの思いで慣れ、この状況を作り出した隣に立つ小さな老人を横目で見た。

隼人の腰ぐらいまでの身長しかない、小柄な老人は、ふさふさの白髪と膝近くまで伸びた白いふわふわな髭がご自慢のようだ。絵本の世界から飛び出てきた小人のような様相であるが、笑い方が独特で、歯をむき出しにして「しっしっし」と笑う。だがどんな顔をしても可愛らしい部類に入ってしまう、そういう得なタイプだ。先ほど聞いたところによると、雲を司る神様なのだという。

この小さな神様と対面してから十分も経っていない。ものすごく気さくに声を掛けられ挨拶し、気がついたらこの見渡す限り遮るもののない空の上にいた。もし高所恐怖症だったら今頃気絶していただろうな、と隼人は全くどうでもいいことを考えたため息をつく。この世界に来てから今までの常識やらなにやらは全く通用しないことを痛感していたため、この突飛な状況を受け入れられるだけの余裕

はあった。当の老人は先ほどから懷を探り、何かを探しているようだ。

小さな空間をどれだけ整理できていないのか、しばらくごそごそしていたが、ようやく何か缶のようなものを引っ張り出した。自慢げに、にっ、と笑って見せてくれたその缶の中に入っていたのは、無色透明の液体。銀色の缶の底が見えるほどに透明であるが、水のようにさらりとはしておらず、とろっとしているようだ。

老人はにやりと笑って「これは特殊な絵の具なのじゃ」と言った。絵の具だ、と言われても、隼人の記憶ではこんな色の絵の具を使つた覚えはない。透明ではただ紙が濡れるだけだと首を傾げる。

にやにやと笑ったままで、老人はおもむろに缶の中に指を入れ、その絵の具をすくつた。皺だらけの指に光るその液体は、透明な蜂蜜のようにとろりと滴つた。

一体それで何をするのだろっ、と隼人が考えていると、老人は絵の具をつけたその指を、目の前の空に向かって横一文字に薙いだ。すると。

青い青い空の中に突如現れた白い雲。

それは老人の指が走るほうへ緩やかに伸びていく。隼人が声もなく目を瞬かせているのをちらりと見た老人は、楽しそうに笑いながら更に絵の具を指に乗せ、青を埋め尽くすように真っ白な雲を連ねていく。

先ほどまで雲ひとつない、文句のない快晴だったはずの空に、今ひとつ、またひとつと生まれていく雲。隼人は無言のまま、老人を見つめた。雲を司る神なのだと、そういった老人を。

「しっしっし」

しわしわの顔にさらにしわを寄せて老人は笑った。体の揺れにあわせて、ご自慢の白い髭もふわふわと揺れる。

隼人は、もう一度雲に目をやった。

青空にまっすぐに伸びた白いライン。強い風に流されてその姿を徐々に変化させ、そして緩やかに空に溶けていく。

隼人は思わずため息をついた。

ああ、こんなふうに

こんなふうに雲を描くところを見せてあげられたらなあ

「行くか？ 見せに」

老人は、透明なその絵の具に濡れた指を動かしながら言った。目線は雲の方に投げられているが、間違いなく自分に向けて発せられた言葉に、隼人は瞬いた。

「え？ はい？」

まるで心を読まれたように向けられた突拍子もない言葉に正直理解が追いつかず、聞き返してしまう。

「行ってもいいぞ。おぬしが見せたい者のところへ。わしが許す」

そっけなくも優しい言葉に、隼人は瞳を瞬かせた。許す、とそんな言葉ひとつで行き来できるような世界ではない。それぐらいは隼人にも十分分かっていた。隼人が、隼人として存在していられるだけでも驚きで、幸せなことだと思っているのにまさか会いに行ってもいいだなんてどんな奇跡だろうか。ああ、でも。

目の前にいるこの小さな老人が“神”ならば。そんな奇跡も奇跡ではないのかもしれない。

隼人は見上げてくるキラキラした視線を受け止め微笑んだ。そして大きく息を吸って吐き出す。戸惑いを、打ち消すように。

会いにいける。きみに。

ただそれだけの想いを胸に、隼人は目を輝かせた。

「よろしくお願いします！」

「ではその前に修行じゃー。描けんことには見せられんぞー」

勢い良くお辞儀をして宣言した隼人に対し、非常に暢気な調子で語尾を延ばして言った老人のその口調に、隼人は思わずくすりと笑った。この羊のようなもこもこ老人、見た目以上にかわゆい。

「はい、頑張ります！」

若者らしい元気のよい返事に、小さな老人は元々細い目をさらに細めた。

序（後書き）

お話の骨格は数年前から、そしてお話の全体の流れが決まったのも3月11日の震災の前でした。人の生き死にを扱う題材で、正直戸惑いもありました。でもこんなファンタジーがあってもいいのではないかと私は思います。少し長くなりますが、最後までどうぞお付き合ってください。

いない。キミが。

どこにも、どこにも。

どうして、なの？

「アキ、ご飯できたよ」

縁側に座り込み、ぼーっと庭を眺めていたアキに、長兄のハルが声をかけた。

夏真っ盛りの八月、夕方の庭には大輪の向日葵がまるで黄色い壁のように一面に咲き誇っている。さわさわと大きな緑の葉を風に揺らし、その存在を声高に主張する。

ちょうど縁側が陰になるように造られた棚に、キウイと葡萄が旺盛につるを伸ばし、その大きな葉を元氣よく広げる。緑のカーテンに遮られた太陽の光は、夕方なのもあってだいぶ柔らかい。

鮮やかな水色のワンピースを纏い、ウェーブのかかった黒髪を背中に流したアキは、蝉の耳障りな鳴き声すら相殺する静かさを周囲に放ち、まるで一幅の画のようにそこに存在していた。

大学生である長男のハルは、学生の特権である夏休みをフルに利用して、今一番の心配の種であるただひとりの妹、アキにかかりつきりであった。体力を生かしたアルバイトに精を出しつつ、やらなくてはならない課題を適当に片付け、空いた時間のすべてでアキの世話を焼く。健康で体力が有り余るほどでよかったと、今ほど感じたことはない。時間は買いたいほどに欲しいが、全ては大切な妹のため。

だが当のアキは、呼びかけられたことにさえ気付かぬ様子で、微動だにしない。呼吸しているのかすら疑わしいほど、風景に溶け込んだ無機質な姿。目線の先にあるのに、咲き誇る向日葵の鮮やかな黄色さえ映さない暗いアキの瞳に、ハルはその広い肩を落とし、小さくため息をついた。

「アキ、ご飯だよ」

今度は肩にそつと手をやって呼びかける。アキはびくりと体を震わせはつと弾かれる様に顔を上げ、ハルを見た。そして瞬時に花の様な笑顔で笑った。

「わ、ハル兄^{にい}、びっくりした。呼んでくれれば行ったのに」

明らかに驚いたのにそれを必死で誤魔化すアキの様子に、ハルは痛々しさを感じその頭を撫でた。

「呼んだよ。大声でな。……ほら、行くよ」

「はい」

アキは元気に返事をしてすぐに立ち上がった。しかしその瞬間にふらりとよろめいた。慌ててすぐ傍にいたハルにしがみついて、バツが悪そうに微笑んで言う。

「ずっと座ってたからかなあ？　はは。……今日の夕飯なあに？」

アキの足元がふらついたのを見逃さなかったハルは咄嗟にアキの身体を支えた。最近はいつもこうだったから、立ちくらみを想定していつも注意を欠かさない。ハルはやっぱり今日も、と思っで一瞬険しい表情をしたが、すぐに笑顔に戻って言った。

「ナツ特製の天ぷらにそうめんだ。今日みたいな暑い日には最適だろ？」

その言葉にアキはにっこり微笑んだ。

「うん、そうだね。早く行こう！」

「……アキ」

「ん？　何、ハル兄？」

自分の腕から空気のようにするりと抜け出して、ひとりで歩き出したアキの背に、ハルは思わず呼びかけた。一瞬迷ったような表情の後で、ハルは短く刈った頭を掻いて笑った。

「いんや、何でもない。さ、飯だ飯だ！」

アキの背中に手を添えてそつと促し、家族の待つ居間に向かった。

日向家では、家事は分担制である。掃除、洗濯、食事……。全てをハル、ナツ、アキ、フユの四人兄弟と、父親である栄さかえの五人で分担して行なっている。

今日の食事当番は次男のナツで、後片付けは長男のハルの担当であつた。

次男のナツはアキと双子として生を受けた高校二年生で、地元の男子校へ通っている。今はやはり夏休み中で、時間を作つては短期アルバイトに勤しむ勤労学生だ。

家族そろつて囲んだ夕食の後で、がちがちと音を立てて皿を洗うハルの元へ、ナツは少し長めに伸ばした明るめの髪をゴムで縛りながら近づいた。

「アキは、大丈夫なのか？ 今晚もあんま食べてなかつたし……。栄養失調になつたりはしないだろうな……」

抑え目の声で心配そうにハルに向かって問うたナツは、泡だらけになつた皿を水で流すべく、水道の蛇口をひねる。ナツは普段から多くの家事をこなしている為、本来ハルの当番を手伝つたりはしない。だがわざわざ自分の隣にやってきた理由をわかっているハルは、何故手伝うのかなどとは聞かず、スポンジを動かしながらナツの質問に答えた。

「栄養は……なんとか足りている……と思う。野菜ジュースやらサブリヤらで……。だが絶対にカロリーが足りてない。大分痩せた。

さつきも立ちくらみを起こしたみたいだ」

ざばざばと放出した水を惜しげもなく使って泡を流していくナツは、重苦しいため息をついた。顔を下げた拍子に落ちてきた前髪を邪魔そうに首を振って払う。その間も顰めた眉は額の中心で細かい縦皺を刻んでいて、不満と悲しみが同居しているような表情だった。

「もう一ヶ月だぞ……。どうしたらいいんだ？ 俺たち兄弟じゃ、アキの心は癒してやれないのかな……」

ナツの独り言のような問いに、ハルも答えを探しあぐねて黙っていた。

考え付く方法は何でも試した。ただアキの為、アキが再び笑ってくれるようにと願い、動き続けてきた。だがアキはその本来の笑顔も、瞳の輝きも無くしたまま、もうひと月が経ってしまっていた。

「アキのあの顔見てるとき、俺、いつそ泣いていいよって抱きしめてやりたくなるんだよね……」

うめく様に言ったナツに、ハルも同意を示した。

「ああ、そうだな……。少しでも気持ちを吐き出してくれれば……」

泡だらけのスポンジを握り締めて、それっきり沈黙してしまったハルの隣で、ナツは呟く。

「……馬鹿やろー、隼人……」

『本当は、お前の仕事だろう』と続けて小さく呟かれた言葉を、ハルは聞こえない振りするしかできなかった。

重苦しい空気が立ち込める、男ふたりが皿洗いをする台所の隣。障子を挟んで居間では未っ子のフユと父の栄がテレビを見ていた。ゴールデンタイムのバラエティで、画面の中ではたくさんの人が賑やかにおしゃべりしている。

大人しくテレビを見ているのかと思いきや、身体だけテレビの方向に向けて実は、遅しい長兄と細身の次兄のふたつの背中を静かに見つめていたフユは、瞬きをひとつして、音を立てずに立ち上がった。

軽快な足音で去っていく末の息子を、同じく居間にいた父、栄は無言で見送った。テーブルに肩肘をつき、フユと同じように身体はテレビの方向に向けたまま、栄はちらりと居間の隅にある仏壇に目をやって、そしてまたテレビに視線を戻した。……画面の中で笑い転げる人々を、見つめるその目は冷めている。焦点もあっていない。

音は、テレビから聞こえる意味のない響きだけ。

家族が賑やかに喋り、明るく楽しかった日向家の面影は、今は、ない。

風呂から上がったアキは、自室のベッドに腰掛け、電気もつけない。

いままの暗がり、何をすることもなく座っていた。最近はどうしてベッドに座り、いつのまにか意識が途切れて眠るのを待っている。別の場所にて眠ってしまえば、家族に迷惑がかかることを学んだのだ。

ここ二週間ほど夢遊病になったかのように、変な場所が目覚めることが多く、縁側で座ったままだったり、玄関の外で意識を取り戻したこともあった。一度はすっかり水に戻った風呂の中で目覚め、朝起きてきてそこに居合わせたナツが、真っ青になって叫び、大騒ぎになってしまった。それ以来、こうしてベッドの上にいれば、いつ眠ってしまっても目覚めたときはベッドの上であり、家族に要らぬ心配を掛けなくてすむ、とアキは思っていた。体が睡眠を求めるギリギリまで目を開けていて、気がついた時には眠っていた、というのが一番楽なのだ。無理矢理寝ようとしても、睡魔は襲ってこない。

ふと、見つめられている気がして顔を上げると、ドアのところに弟のフユが立ってこちらを伺っていた。フユは日向家の三男で末子、今年十一歳の小学校五年生だ。ナツと同じ少し明るめの、くるくるした髪に、母親譲りのくりつとした大きな瞳。まるで天使のような容貌は、ご近所のおばちゃんたちのアイドルと化している。

アキは少し首を傾げ、そしてフユに向かって手招きをした。

「どしたの？ フユ。入っておいで？」

その言葉に、フユはとことこと近づいてきて、アキの座るベッドの端にちょこんと腰掛けた。

「アキちゃん、ぼくね……」

フユは言い出すなりそれっきり口ごもってしまい、もじもじしている。ものすごく可愛いが、それでは一体何が言いたいのか全くわからない。フユの柔らかな髪を撫でながら、アキは先を促した。

「フユ？ どうしたの？ 何か言いたいことがあるんでしょ？ 言ってごらん？」

「う、うん……。あのね、ぼく……。ね……。このあいだ、隼人兄ちゃんを見たんだよ。アキちゃんが座ってるえんがわのね、ひまわりの前に立ってね、アキちゃんのこと見てたの」

まだ幼い弟がもじもじと言った突拍子のない発言に、アキは目をみはる。言い難そうにしていた理由が分かった。幼くたってフユには分かっているのか。アキの顔が一気に歪む。

「……フユ。隼人兄ちゃんはもういないんだよ？ 一緒に見送ったでしょ？」

動揺して声が震えるのが分かる。フユの頭を撫でていた手も、油の切れたからくり人形のように、ぎこちなく彷徨う。だがフユはアキの動揺に気付かず、むしろ嬉しそうに話し出した。

「うん、アキちゃん言ってたよね。隼人兄ちゃんは、ママみたいに天国へ行ったんでしょ？ ママもね、時々会いに来てくれるんだよ。夢でね、会ったんだ」

フユの何の気ない言葉と無邪気さがアキに激しい衝撃と動揺を与える。胸が苦しくて、思わず「ひゅっ」と息を飲み込んだ。

……本当にそうならいい。幽霊だって夢だってなんだっていい。

もう一度会えるなら。

……だけでもう会えない。もうこんなにも純粋な子供じゃない。分かってる。……十分すぎるほど、分かっているのだ。

イライラが、言葉に棘を生やす。

「フユ、お姉ちゃんそういう冗談はキライよ。天国へ行った人には会えないの。……死んじゃった人には、二度と会えないんだよ」

自分の言葉に余計に傷ついて、胸がずきんと痛んだ。目の淵に溢れようとする涙を堪えるのに、のどが痛む。

上からポツリポツリと屋根に当たる雨の音が聞こえてきた。大粒の雨音。

いつもはやさしい姉が初めて見せる荒げた声と突き放すような態度に、フユはびくりと体を揺らし、アキから離れるように身を縮めた。

「……っ！ アキちゃん、ご、ごめんね……。ぼ、ぼく……」

弟の大きな瞳から涙が溢れるのを見て、アキははっとした。慌ててフユを慰めるも、甘やかして育ててしまったのか、末っ子の彼は昔から一度泣き出すとなかなか泣き止まない。

泣く少年と連動するかのように、降り出した雨はスコールのように一気に本降りになり、屋根を叩く。

「フユ、ごめんね、フユは悪くないよ。お姉ちゃんが悪いんだよ、ごめんね……」

子供特有の少し高めの体温を感じながら、アキはその柔らかい体を抱きしめる。ざあざあと振り続ける雨の音に紛れながらひっそり、

としやくりあげる小さな体をさすり、ごめんねを繰り返す。

心に、穴が開いている。

こんな風に、フユを怖がらせて泣かせたことなんてなかった。それ以上に、泣いているフユを見ても、動かない心。

ブラックホールのようにぽっかりと胸に開いた穴は、深く黒い闇の中で、何もかもを噛み砕き、飲み込み、沈ませ、全ての感覚を麻痺させる。痛みだけが、チクチクと刺すような、ジクジクと滲むような痛みだけが、執拗にアキを責め立てる。まだ、生きているのだと、体の存在を声高に主張する。

隼人

動くべき脳の大半はただひとつの思念に取り付かれるように停止している。

隼人

フユの柔らかな髪を撫でつつ、くちびるは想いのこもらない「ごめんね」を呟き続ける。さきほどは堪えられたはずの涙が、ぼろりと頬を伝っていく。

隼人

どうして

死んでしまったの？

薄れていく意識の片隅に、耳障りな雨音がずっと響いていた。

雨はキライ。

君とさよならした日のことを
思い出してしまうから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8097z/>

神様の絵の具

2011年12月25日21時54分発行